

いつまでも元気に歩こう！～股関節の痛みに対する治療法～

大阪市立総合医療センター整形外科副部長 松浦正典

股関節は脚の付け根にある大きな関節です。片脚で立つとき脚の付け根にかかる力は、両脚立ちのときの約 2.75 倍にもなると言われています。従って、人間が歩行するのにとても重要な関節です。股関節に起こる代表的な疾患として「変形性股関節症」、「大腿骨頸部骨折」があります。

「変形性股関節症」は、関節を覆っているクッションの役割をする軟骨が加齢や過度の負担がかかり摩り減ること（摩耗）により骨同士が直接こすれ合うようになって変形を生じた結果起こる疾患です。加齢と先天的な股関節の発育不全が主な要因で外傷後の変形、関節リウマチ、大腿骨頭壊死症なども原因とされています。病状に応じて「前期」「初期」「進行期」「末期」に分類されます。「前期」では自覚症状はなく、「初期」は立ち上がったときや歩き始めに股関節に痛みを感じる段階です。「進行期」になると長時間歩いたり立っていることができなくなり、股関節の動きが制限されます。「末期」では歩行しにくくなり、夜間も痛みが続くようになります。また腰や膝にも痛みが拡がることもあります。診断にはレントゲン撮影が必要で症例によって CT や MRI が必要となります。治療法には保存療法と手術療法があります。

保存療法は、股関節に負担をかけないようにする日常生活での工夫、杖の使用、運動療法、鎮痛剤の投与など手術以外の治療のことで、疾患自体は進行性ではあるが、早い段階であれば適切な保存療法を行うことで経過を見ていくことができます。手術療法には変形の程度により、骨切り術や人工股関節置換術などがあり、自分の症状や望む生活を考慮し、手術の利点・欠点を医師とよく相談したうえで選択されます。最近体への負担が小さい低侵襲手術が増加してきており、当科でも施行しています。

一方、「大腿骨頸部骨折」は股関節を形成する大腿骨の一番細いところ（頸部）が折れることで、転倒によっておこることが多い疾患です。発症は高齢者に多く、通常は脚の付け根に激痛を感じて歩けなくなります。ただ中には骨折の程度が軽い場合には歩ける例もあり注意が必要です。この場合、骨折のずれがほとんどなくても後からずれて転倒後数週間たってから歩けなくなることもあります。

大腿骨頸部骨折は 2007 年には約 15 万人が発生していると報告されており、年々増加傾向です。またこの疾患の発生を契機に寝たきりとなることも多く、大腿骨頸部骨折患者の約 10%は 1 年以内に亡くなるというデータもあります。

治療は基本的には手術療法が必要で、「骨整復固定術」と「人工骨頭置換術」があり、骨折した部位のずれの程度や年齢、健康状態、活動性によって決定されます。いずれの場合も早期にリハビリを開始することが重要です。この疾患の背景には、骨が脆くなる「骨粗鬆症」が潜んでいることが多く、予防することが大切であり、食事をはじめ日常生活に注意することと、転倒予防のため家の中の環境を整備することも重要です。

上記 2 疾患を中心に股関節の痛みに対しての治療・注意点等について講演で詳細を述べます。